

立羽不角年譜稿 二

安田吉人

本年譜は、平成十年三月刊『調布学園女子短期大学紀要』第三十号掲載の「一」に続くものである。その後、多くの方々から御教示をいただき、また新資料の発見もあった。しかし、なにぶん浅学の私ゆえ、今後遺漏が少なからずあるかと思われる。そこで、訂正や追加は本目録完成の折に一括させていただき、まずは目録を書き進めることにした。なお、本稿をなすにあたって、雲英末雄先生より貴重な御蔵書のコピーを賜った。ここに改めて御礼申し上げます。

元禄六年（一六九三）癸酉 三十二歳

▽一月二十五日、調和点前句付興行に入選（『洗朱』）。

▽一月、菊子編、雑俳前句付集『難波土産』刊。不角点の前句付を『二葉の松』より抄録して紹介。当代三都の前句付を網羅した集で、大坂の西鶴・豊流・遠舟の他、外篇に江戸の調和・不角、京の常牧・和及点を収める。

▽二月、桃林軒編、俳諧撰集『かれこれ集』成。不角の付句一句収録。
・ 雨の音いろ／＼にきく柳哉

花散るまでは正月の空 不角

主に上方の俳人や蕉門の作を、発句・連句・付句に分類、巻末に哀傷と賀の部を添える。

▽三月一日、四月一日、調和点前句付興行に入選（『洗朱』）。

○六月、不角編、前句付高点句集『一息』成。自序。卷末に不角独吟世吉を収録。本書より、高点句集を半年毎の刊行とする。

・ふた葉の松の実植よりわかみどり生立、千代の古根をきざしぬ。日に言草の種しげく、かき集るにいとまなみ、北海の果しなき心ちこそすれば、六月にして筆を息。鷓鴣も笑はんかし。

序は『二葉の松』以降の前句付高点句集の着実な成果を強調し、集句の増加にともない刊行を年二回にする旨を記す。実際に、一月二七日の入集句は二三七句に及び、以後百句を上回る興行がしばしばある。

・ 月額そりて新しき顔

水上は養老ならん江戸の井戸

秋水

・ 井筒を越て湧出ル水

竜宮を見卑ス江戸の竜の口

心角

京の紅奪ふか江戸の紫屋

才角

など、都市「江戸」を詠む付句も見える。

※半紙本二巻二冊。前句付高点句集の第四集。自家版。一月と六月締切分を収録。上巻、大阪女子大学山崎文庫蔵。

下巻、東京大学酒竹文庫他蔵。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に下巻のみ翻刻。

▽七月、鉄虎編、俳諧作法書『誹諧呉竹』成。下巻に、一品発句による桐風の脇起歌仙を掲げ、一品の批点と併せて、密かに求めて得た其角・調和・露言・不角の批点を句の上に対照して示す。一品に好意的な立場で編集された書だが、不角が当時の江戸を代表する点者として認知されていた証にはなるう。なお、不角点は「五葉五点・交葉四点・朱葉三点・日葉二点半・長二点・円月一点半」の六種類の点印で、一品・其角の四種、調和・露言の五種よりも等級を細かくしている。

▽九月十五日、月次発句興行始まる。以後、毎月一回、十五日を締切として、不特定多数の投句者から四季発句を募る。

一人で複数句応募することを認め、点印も「五葉・交玉・交葉・朱玉・朱葉・日葉」と前句付より細かくランク分けし、投句者の競争意識を煽っている。すでに前句付の集句システムが機能していたので、興行面での困難は少なかったであろう。それにしても、翌年には発句興行も月二回の締切となる。前句付と合わせると一ヶ月に四回の選句を行なうという、なんとも凄まじい点者生活である。

・大空を我もの白や啼雲雀

二本松文車

・雪溜んまでに傘指ス子共哉

桑折不碩

投句者は、前句付とほぼ重なるが、文車らのような地方の有力俳人は、概して前句付よりも発句に熱心な投句者であった。あるいは、彼らの意識の中に、発句の方が文芸として格が上という意識があったのではなからうか（『としく草』）。

▽一月二七日、前句付興行、最高点句に初めて「極朱」点を用いる。

○二月、不角編、前句付高点句集『二息』成。自序。巻末に不角独吟百韻を収録。

・我宿は平松町の南側

書籍の外に俳諧も売ル

と、百韻中に自らの住所と家業を暗示する付合が見える。平松町は、日本橋の南側、当時江戸のメインストリートであった南通一・二丁目の東側の横町である。

また、この年頃より、付句に次のような類型が見えるようになる。

・唾方な方にかゝりあひけり

一盃の酒に殉死の身は下直

素英

・費な物よ海へふる雪

兀山をいはゞ国土の席ふさぎ

如卜

「身は」「いはば」を用いて、比喻表現を手軽に句に採り入れるのである。

※半紙本二卷二冊。前句付高点句集の第五集。自家版。七月～十一月締切分を収録。洒竹文庫他蔵。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に翻刻。

○一二月、不角編、月次発句高点句集『としく草』成。「元禄癸酉晚秋中旬」撰の自序。卷末に不角の前句付二組を付載。奥書に「年々草、懈怠なく例年編集仕候」と、続刊の意志を表明する。

各締切日毎に、五葉・交玉・交葉・朱玉・朱葉・日葉の段階別に高点句を紹介、最後に高点者二三名を掲げる形式は、前句付高点句集に倣う。

・黒焼はもとの白地に寒烏

時杳

・初雪やくふて味はなけれども

破扇

九・十月分の最高点を受けた句だが、前句付同様の風情である。

※半紙本一巻一冊。月次発句高点集の第一集。自家版。九月～一二月締切分を収録。京都大学文学部蔵。

元禄七年（一六九四）甲戌 三十三歳

▽二月下旬、田宮禎編、雑俳撰集『奈良土産』刊。不角点の前句付を収録。

・江府不角前句△川の流れは人のゆくすゑ

京 言水前句△風にゆるるゝ川波の塵

誰が魂も乗り捨たらむ瓜の駒

幽吟・西鶴・言水・桃青・不角ら点の前句付からはめ句を指摘する。不角点は、『二葉の松』『若みどり』からの抜粋だが、一部出典不明の句もある。

○五月、不角編、前句付高点句集『へらず口』成。自序。卷末に不角独吟源氏を収録。

・予は一月に数万の句を調合して嘸ムといへども、一ツもうるはしき味をしらねば、句の煩ひを治事あたはず。然レ共、世人の御そだてに腸を肥ス。

と、序において多忙な点者生活を記し、続いて、

・或人来て、数千の句の中にて一句非を打て、聞きあやまれりと。吾答テ曰、凡君子道は論ニ大功ヲ、小瑕を以不レト疵いへり。かく申ばとて、我あやまらぬにはあらず。只附らるゝ人の御見のがしを仰ぐのみと。真を謙ヘリクダレば、天是を助るにや。さいふたる人もわが俳風を棄ず。

とある。点者側の句の誤解やはめ句の見落としては、不角に限らず世の点者がしばしば攻撃の対象とされる所だが、その批判をかわしつつ、興行への自信を示している。

※半紙本二巻二冊。前句付高点句集の第六集。自家版。一月ノ閏五月締切分を収録。綿屋文庫他蔵。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に翻刻。

○五月、不角編、俳諧撰集『蘆分船』成。著名俳諧宗匠から蕉門俳人まで諸流を含み、奥州から薩摩にまで入集者が及ぶ本書は、不角の生涯を通じての代表的撰集である。素翁序。「元禄七甲戌林鐘下旬」自跋。不角の発句五六句、不角一座の連句一一巻収録。各冊を春夏秋冬に分ち、最初に不角一座の連句を置き、次に類題別に諸家の発句を配列する。ただし不角の句のみ、冬の部巻末に一括する。連句の連衆は以下の通り。

「誰かいふ」歌仙（調和・不角）、「帰る雁」一折（峽水・不角・立些）、「白雨や」歌仙（嵐雪・不角）、「五月雨の」歌仙（長孝・不角）、「拾着て」歌仙（松角・柳角・不角）、「尼寺の」表八句（袖角・不角・扇角他五人）、「何者が」歌仙（立志・不角・立吟）、「女郎花」歌仙（挙白・不角）、「菊に菊」歌仙（無倫・不角）「秋の朝」歌仙（琴風・不角）、「雪しまき」歌仙（山夕・不角）、「寒さうに」歌仙（松琴・不角・文士）。

発句の入集者は不角一門の他、素堂・西鶴・露言・東潮・不卜・沾徳らの著名俳人、二本松の文車・伊達の如濁・桑折の不碩・三河の白雪ら地方の有力俳人がいる。

・あひ初て後呉服屋に物がたり

嵐雪

・郭生レは気をつまる恋

不角

・上野にて

黒門の黒きが中に桜かな

不角

・入月のさはるか動くむら薄

不角

作風は、当時流行していた景気の句と前句付風の人情の機微に立ち入った句が適度に混じっている。

※半紙本四卷四冊。自家版。綿屋文庫・洒竹文庫他蔵。

○六月、不角編、月次発句高点句集『底なし瓢』成。自序。上・下巻、各巻頭に第一席投句者（一月・五月分）の発句を脇起にした不角独吟歌仙一卷を収録。序に「今の世の人の作意、いづれの時の方に劣らん。総身に口有て句の曲を嘯」と、当世の作意に満ちた多彩な句風を讃えた後、自らの作風を「水くさき」と評す。脇起歌仙はその欠点を矯正するための稽古であるとするが、しかし、脇起歌仙の真の目的は、第一席の名誉を高めることにより投句者の競争意識を煽ることと、自身の作風を読者に示すことであつたと思われる。

※半紙本二巻二冊。自家版。一月〜六月締切分を収録。上巻、洒竹文庫蔵。下巻、綿屋文庫蔵。

▽六月、南水・安之編、俳諧撰集『熊野がらす』成。不角の発句二句収録。熊野本宮の御師による撰集で、四季発句の部は、熊野衆や大坂談林を中心に、諸国の俳人の句を集める。ただし、不角の発句は二句とも、『としく草』に、付句の例として掲出したものである。

▽七月、友鷗編、俳諧撰集『芳里袋』成。下巻（上巻未見のため、今、下巻のみの句数を記す）に、不角の発句三句、跋を収録。讃岐国松賀浦の友鷗の東下記念集。

・身は風鳥の軽装束、何に拘べき姿ともおもほえぬ 薨、いまだ不二見ぬ事を歎かしうして、終不堪、江府に屢々艸鞋ずれを休ひ、既帰矣。土産に人々の句を集めぬ。まことに富峰の名残り、是風になびく雲の綻を縫せんとや、針袋負つゞけながらいまさんに、誰とがむべき。三界広し膝を容に前後支へず。吁楽哉、紙小菴。嗚呼余波惜や、松賀浦の友鷗。

はり帛縮や冬の柳でも

江府松月堂不角

▽九月一日、月次発句興行、今回より月二回の締切となる（『足代』）。

○一月、不角編、前句付高点句集『誹諧うたゝね』成。自序。卷末に不角独吟五十韻を収録。

・予が五句附は二十五銭。噫無下成哉、工夫一字もなし（略）世の作の働たる形をいはず（略）家持が屋守を尋ね、衛門は甚三紅染やと作意を捜す。目出たいかな野夫は鍬を杖突て、礦の土も動かぬ君が代と句作り、漁夫はうたかたの波も静なる事をのぶる（序）。

前句付の点料は、仮に一文を十円と換算すると、一興行五句一組あたりの投句料が約二百五十円になる。庶民にも親しまれる手軽な娯楽であった。また、古典を俗化する趣向を列挙する序の一節は、前句付が瞬間的な衝撃度を重視して一句の独立性を求めていたことを示すとともに、不角自身の俳境も暗示してしよう。

※半紙本二巻二冊。前句付高点句集の第七集。自家版。六月〜十一月締切分を収録。志田文庫他蔵。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に翻刻。

○一二月、不角編、月次発句高点句集『足代』成。自序。上・下巻、各巻頭に第一席投句者の発句を脇起にした不角独吟歌仙一巻を収録。

・女には落馬はなしやおとこえし

甲州住白鷗

・うらはらや照ルは漏をく雪の宿

甲州妙言

いずれも第一席の句だが、高点句は無理に趣向を求めたものが目立ち、むしろ、

・夫婦して子を泣せ鳧春の雨

千雀

・歎キ侘子なき夫婦の火燧かな

青柳

など、平点に近いものに佳句が多いように思われる。

※半紙本二巻二冊。自家版。六月〜十一月締切分を収録。志田文庫他蔵。

元禄八年（一六九五）乙亥 三十四歳

▽二月、文車編、俳諧撰集『花蔀』成。不角の発句三句収録。

・ のこる松さへと読しも更也

あるが中にさても冬哉峯の松

不角

は、冬の部の最初に置かれる。

○五月、不角編、前句付高点句集の第八集成か。原本未発見。

○六月、不角編、月次発句高点句集『俳諧水車』成。自序。上・下巻、各巻頭に第一席投句者の発句を脇起にした不角独吟歌仙一卷を収録。なお、本書には、不角が後年恩沢を蒙る備前岡山藩主池田綱政が、「備前備角」の号で初入集する。

・ 人の気を招くやう也夏の不二

備前備角

※半紙本二巻二冊。自家版。一月〜六月締切分を収録。綿屋文庫蔵。

○一二月、不角編、前句付高点句集『昼礫』成。自序。巻末に不角独吟源氏一卷を収録。巻頭に新たに「極朱」点を掲げ、両朱・両葉の上に置くことを定める。

・ 付句に一句はさも有ながら、前句へよりなき句多し。案ずるに、作者も合点はゆかねども、若判者の色々に心を取て聞やせんと、見えぬ再盗^{ヌス}成べし(序)。

投句が一句立の趣向に走る傾向を指摘、前句との付合が難解になる原因を、判者・作者双方の問題として戒めている。

※半紙本二巻二冊。前句付高点句集の第九集。自家版。六月〜一二月締切分を収録。愛知県立大学図書館他蔵。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に翻刻。

○一二月、不角編、月次発句高点句集『俳諧草結』成か。自序。上巻巻頭に第一席投句者の発句を脇起にした不角独吟歌仙一卷を収録。

※半紙本二巻二冊、零本一冊(上巻)。自家版。七月〜九月締切分を収録。上巻から察すると、本年一二月には興行がなかつたか。綿屋文庫蔵。

元禄九年（一六九六）丙子 三十五歳

▽三月上旬、里圃編、俳諧追善集『翁草』成。不角の発句一句収録。

・欲目には八重を誉けり山桜 不角

芭蕉一周忌追善集だが、「追加」の部の不角の句は追善句ではない。

○五月、不角編、月次発句高点句集『俳諧松蘿前集』成か。自序。巻頭に第一席投句者の発句を脇起にした不角・好角・讚秋の三吟歌仙一卷を収録。

丁付は「卅終」とあり、一冊本の中に一月～五月締切分を収録する。前年上半期分の『俳諧水車』が二冊本で、合計四七丁分であるのに比較すると、大幅に縮小されている。また、「前集」とあるので、九年下半期分の「後集」の存在も予測されるが、原本未発見。その後の月次発句高点句集も未発見なので、興行が行き詰まり、それ自体から撤退した可能性もある。

※半紙本一卷一冊。自家版。唯一の伝本、酒竹文庫蔵本は、序題「俳諧松蘿」、外題「俳諧さるをかせ前集」。

○五月、不角編、前句付高点句集『矢の根鍛冶前集』成。自序。巻末に不角・文士・和英・讚秋・松泉の五吟百韻一卷を収録。

・凡、俳諧は工夫を師とせん。我習はずしてしかも其道に叶りと云人有。予答て、それあやまれり。抑、物の上手に至らんと思はゞ、先己れはあくまで下愚成と思慮して学マナびば、必ず上手に至らん。若し上手成と思はゞ、点あひ悪タカフリヒトラき時は述懐の心益にして、終に其道あぢきなく成行て止もの也（略）点甚宜コナき時は元て人見卑す心出べし。

※半紙本二卷二冊。前句付高点句集の第一〇集。自家版。一月～五月締切分を収録。綿屋文庫蔵。

○一二月、不角編、前句付高点句集『矢の根鍛冶後集』成。自序。序に、

・かくていとまなきに、年く桜にちりばめるとなみ、思はずものびくクに成て人くクの催促にあふ。

とある。点者生活の多忙ゆえか、句集刊行も遅延ぎみになっていたようである。あるいはこのことが、翌年以降の興行・高点句集の形式の変更につながったか。

※半紙本二卷二冊。前句付高点句集の第一集。自家版。六月～十一月締切分を収録。上巻、綿屋文庫蔵。ただし、下巻の唯一の伝本は、不角一座の連句があったであろう巻末数丁が欠損している。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に翻刻。

▽十一月、稻丸編、俳諧撰集『呉服絹』成。不角の発句一句収録。

・ 呉漢の織女我朝に渡りて、

はたものをなせる

新絹やいかに呉服の日本尺

江戸不角

摂津国池田にある呉服・穴織両神社に奉納された本書は、畿内を主に古今俳人の呉服にちなむ句を集めている。

元禄十年（一六九七）丁丑 三十六歳

▽一月十二日、前句付興行、三句付になる。今回より、前句は短句二句・長句一句の出題となり、点印も「極朱・九葉・両朱・七葉・両葉」と細分化された。なお、調和点の前句付興行は、すでに元禄七年冬に五句付から三句付に移行している（『双子山前集』・『洗朱』）。

▽閏二月二九日、挙堂編、俳諧作法書『真木柱』刊。不角の発句二句収録。俳諧六躰内の「心利口」・「けり留」の項に例句が挙がる。

・ 心利口

植木屋の亭主留主也花いまだ

其角

秋の雲泪なそへそ鼻毛ぬき

不角

○五月、不角編、前句付高点句集『双子山前集』成。自序。上巻巻末に無倫・不角・艶士の三吟世吉、下巻巻末に不角独吟歌仙を収録。興行は三句付になったが、形式はこれまでの前句付集を踏襲する。

・ 友二人三人来りて、深川の蛭見にといざなふ。一樽をも抱て行やととへば、虚腹カラを荷にしてまかると答ふ。

予は、餉なんどたうべてといへば、家出の遅きよしのゝしる。華より団子といふ事をしらずやと戯て。業平も先ッものの喰ふてかきつばた 不角

二重におもふ拾かたびら

独吟歌仙の前書に、不角の日常が見える。

※半紙本二巻二冊。前句付高点句集の第一二集。自家版。一月〜五月締切分を収録。国会図書館蔵。鈴木勝忠氏『雑俳集成第二期』に翻刻。

▽六月、調和点、壺瓢軒調和清書所編、月次発句高点句集『夕紅』成。不角の発句による七吟（不角・調和・直方・和推・和英・准漢・止水）歌仙一卷収録。

・片肌はまだ脱残す涼ミ哉

不角

折の干菓子を夏の雪打

調和

同書は、元禄七・八年の調和点月次発句寄だが、不角の発句は見えない。

▽八月、桃隣編、俳諧紀行・撰集『陸奥衝』成。不角の発句四句、肖像画を収録。桃隣の陸奥行脚の餞別句に添えられた肖像は剃髪前の若き姿である。

・一人行桃隣、為仲のまねはならじ

関越ん花にはせめて替草鞋

不角

▽八月、書肆編、雑俳撰集『誹諧江戸土産』刊。不角の発句三句、一座する歌仙一卷、不角点前句付勝句を収録。上方に江戸の俳諧と前句付を紹介した書で、不角・其角・不卜・調和・無倫・一品点の前句付を、各点印を掲げて紹介する体裁をとるが、実際は一品点を除きすべて不角編『へらず口』の流用。発句・歌仙も不卜編『続の原』からの抄録である。

▽秋、無倫編、俳諧撰集『紙文夾』成。不角の発句による五吟（不角・無倫・里風・我笑・和英）歌仙一卷収録。調和・立志ら江戸俳人の句が多いが、発句は入集せず。

・浦紅葉半分淋し秋の暮

不角

千鳥雁金遊ぶ海士が子

無倫

あゆそゝきあぶなくの月影に

里風

○一二月、不角編、前句付高点句集『双子山後集』成か。

※原本、未発見。前句付高点句集の第一三集。六月と一二月締切分を収録したか。

元禄十一年（一六九八）戊寅 三十七歳

▽二月一五日、佳聚亭編、俳諧撰集『寄生』やどりま成。不角の発句四句（洒竹文庫蔵本は、上巻のみの零本）収録。四季各一句のうち、

・ 秋 名月

秋は半いぬめり月はいなぬめり

江戸不角

は秋の部の部首に配列。なお、序文は不角門の霽月堂不磷。

▽三月、調和編、前句付高点句集『洗朱』成。不角の高点句六句（他に席次のみを記す興行四回）収録。江戸における前句付興行では先輩にあたる調和の、貞享四年七月と元禄七年一〇月の興行分を収録。高点句集刊行にあたっては、不角の成功に刺激された面も少なからずあったであろう。

▽三月、調和編、俳諧撰集『面々硯』成か。不角の発句一句、付句をする歌仙一卷・百韻一卷収録。「七種の」歌仙は、但馬国豊岡藩主である駒角の慈父追善歌仙で、駒角の発句以下、江戸・京・大坂・大津・田辺で付廻されてもの。湖春・沾徳・素堂・似船・信徳・言水・来山・才麿・団水・尚白ら、当代の著名俳人が並ぶ。

・ 永観堂の門番のあき

秀和

餌に飢て廿日鼠の廿日なき

不角

蠶のからや空蟬の果

無倫

「声の果」百韻は、二十句ごとに連衆を替えて巻かれたもの。不角は花蝶・調和・嵐雪・神叔との最初の二十句に参加するが、付句一句のみで、七句目以下は調和・嵐雪・神叔の三吟。

▽五月二十七日、三句付前句付興行、「是より点例を改ム」とし、大極・銀漢・九曜・蒼溟・俊・豪を用いる（『誹諧広原海』）。

▽六月上旬、艶土編、俳諧撰集『水平目』刊。不角の発句三句収録。艶土が調和門に転じた折の記念集。調和一門だけでなく、其角・嵐雪・桃隣の句も見える。

・身ひとりの不破そ月もる破れ笠

不角

▽七月、不角、書肆として前月刊『水平目』を再刊。なぜ相前後して、別書肆から刊行されたかは不明。六月刊行本（知十文庫他蔵）の刊記は、「元禄十一曆戊寅季夏上旬出版。江城下梓林通油町佐藤四郎右衛門」。一方、七月刊行本（岩瀬文庫蔵）は、

・元禄十一戊寅歳初秋日

板元平松町立羽不角

とある。「立羽」姓の初見か。

▽秋、浅草の幽松庵に滞留していた俳人東行が、浪華に帰るのを送り餞別句を詠む（『東行撰集抄』）。

・しばし名残を惜むべきも、

かぎり有旅とや。さらばく

まな合羽尾花とむべき袖もなし

不角

元禄十二年（一六九九）己卯 三十八歳

▽十一月二十七日、前句付興行、二句付になる。『誹諧広原海』によれば、元禄十年正月以来続いていた三句付興行は、二七日で廃され、代わって「二句付初ル」とある。

「二句付」は、これまでの呼称に従えば、前句題を二句出題する興行となるが、高点句集や清書巻の資料から、一つの

前句題に対して、一人で二句投句する興行を示すことがわかる。

▽一二月、東鷺編、俳諧撰集『小弓俳諧集』刊。不角の発句六句、東鷺餞別両吟歌仙一卷収録。

・ 送東鷺帰尾陽

柳いさ薄ものせよ千代結び

不角

立て見居て見程をとる月

東鷺

▽この年、等躬編、俳諧撰集『伊達衣』成。不角の発句四句収録。須賀川の等躬の第二撰集で、調和系の色彩が強いが、蕉門の句も多い。下巻巻軸は次の句。

・ 行く／＼て脇道もなし年の坂

松月堂不角

元禄十三年（一七〇〇）庚辰 三十九歳

▽一月、方山著、俳諧作法書『暁山集』刊。不角の発句一句収録。貞門諸家の他、蕉門の句も引用して俳諧の法式を説く。

○三月三日、不角点、松月堂清書所編『風夕宛二句付清書卷』成。『誹諧広原海』に収める同日興行分と一致する。第一席を得た風夕に、褒賞として進呈された清書卷である。奥書には以下のようにある。

・ 銀漢二 九曜十一 蒼溟卅八

俊九十三 豪二百廿一 英二百十一

交二百一 朱九十八 長四十九

不角

元禄十三年辰三月三鳥

風夕雅丈

松月堂清書元

本書と『誹諧広原海』を検討すると、投句された千句の内、なんらかの点印を得た句が九二四句。高点句集には「英」までの一四・四％が紹介されたことがわかる。

※綿屋文庫蔵『松月堂不角俳諧帖』（写本。横本一〇冊）の第十集（猿猴の巻）にあたる。本年譜では、同書の性質を

鑑み仮題を付した。なお『松月堂不角俳諧帖』は、同書以外は年記を持たないので、一括してここに整理しておく。いずれも不角点の清書卷。

①「更夜神楽」半歌仙。②「高砂の」歌仙。③「積善の」半歌仙。④の1「縫箔の」半歌仙。④の2「桜鯛」半歌仙
〔綿屋文庫連歌俳諧書目録〕は形態により一括。⑤「八歳宮の」歌仙。⑥「紀行の」歌仙。⑦「塞ヶ炉は」歌仙。⑧
「枝ながき」歌仙。⑨「指足して」歌仙。⑩「風夕宛二句付清書卷」。

作者・点印・落款から、①④⑤は享保五年前後、⑧⑨は同一四年頃、その他も元禄末〜享保頃の点巻と推定される。

▽春、句空編、俳諧撰集『誹諧草庵集』成。不角の発句一句収録。加賀の句空が芭蕉を偲んで編んだ書だが、発句は広く蕉門内外から集められている。

・桐の葉や情はらふて散ルけしき 不角

▽十一月、書肆編、雑俳撰集『誹諧馬だらひ』成。新板の笠付部分に『誹諧江戸土産』の前句付を流用した書。ゆえに、不角編『へらず口』の流用。

元禄十四年（一七〇二）庚辰 四十歳

○一月、不角編、歳旦帖『福神通夜物語』刊。不角自作の「福神通夜物語」の中で、一門の句を紹介するという趣向を凝らした歳旦帖。「物語」は、大晦日の夜に「俳道の栄行事を、かつは連衆の作意至らんことを」祈願するために弁天社に参籠した不角が、夜更けに福神たちの賭俳諧を目撃する。

・福神間近召れし故、敬て曲拜し「有難き君が代に生れあひて、かんくはの働をしらず。遊民の中にして俳諧を楽むもの」と申上る。「然らば例年のごとく歳旦の一冊を奉納すべし」

と、仰せ付けられる。僅か四丁の小話の中に、大晦日の世相や福神の宴を描き、歳旦帖の由来を語る、才気溢れる創作である。歳旦帖は、歳旦三つ物（不角付句は三組）・発句・半歌仙、歳暮発句からなる。江戸近隣の他に、備角系の入集者が多い。

・ 五十^八杖^二於家^一、六十^八杖^二於郷^一、
七十^八杖^二於国^一、八十^八杖^二於朝^一、

予はいまだ杖の力をからず

老初^シぬ干とせの坂のあがり口

松月堂不角

※半紙本一巻一冊。自家版。洒竹文庫蔵。

▽三月、羨鳥編、俳諧撰集『たかね』成。不角の発句一句収録。伊予の羨鳥の撰集。

▽五月二七日、参勤交代で岡山に帰る備角を見送り、川崎に行く。

・ 横乗りをめすべし富士の桜比

不角

そのついでに、好柳・好角とともに数日間江の島・鎌倉を遊山する。

○五月、不角著、俳諧紀行集『紀行笠の蠅』成。旅の記述は芝に始まり、東海道・江の島・鎌倉・金沢の順路に沿う。

書名は卷末の歌仙の朋角の発句「笠の蠅何処の宿から付て来た」による。

・ なま煮めしの歯に付てにちやく。せんたく箸の生乾き。椀に鯛の匂ひが残りてむつとする。

川崎の安宿の一節は、細部まで描写を尽くし、しかも滑稽味豊かである。

なお、文中の俳諧に関する記述から、不角は風虎・三千風と面識がなかったこと、未琢を自身の俳系につながる人物として理解していたこと、因角がこの頃渭北に改号したことが知られる。

※半紙本三卷三冊。自家版。角書は「江の島／鎌倉／かなざは」。国会図書館他蔵。加藤定彦氏編『関東俳諧叢書』に翻刻。

▽七月、東鷺編、俳諧撰集『乙矢集』刊。不角の発句一句収録。

▽一〇月、書肆編、雑俳勝句集『誹諧絹ばかま』刊。不角点の前句付を収録するも、『難波土産』からの転載。

▽この年、寸虎編、俳諧撰集『すなつばめ』刊。不角の発句四句収録。寸虎が前年芭蕉七回忌に義仲寺を訪れたことを記念した集で、蕉門を主に、不角系の俳人も入集している。

・紙鳶きれて空の名残となりにけり

▽この年、長男不局、誕生（『はつ霞』他）。

江戸不角